情報広場

広報広聴について

「第十六回世論調査」の結果がまとまりましたので、その概略をお知らせします。

今回のテーマは「広報広聴について」です。広報広聴業務は、市民の皆さんに市政の現状をお知らせし、正しく理解してもらい、また皆さんのご意見を市政に反映するため、市民と行政を情報というパイプでつないでいます。

調査は、住民基本台帳から無作為抽出した三千人の市民の皆さんにお願いしました。なお、調査結果は「第七回世論調査（広報広聴について）」の結果と比較しながらお知らせします。

「広報ふじ」・「広報無線放送」を中心に

問一の「市の仕事やお知らせを何によって知りますか」の設問では、「広報ふじ」が四十七・六%、「広報無線放送」が二十二・二%と、両者で全体の約七十%を占めています。

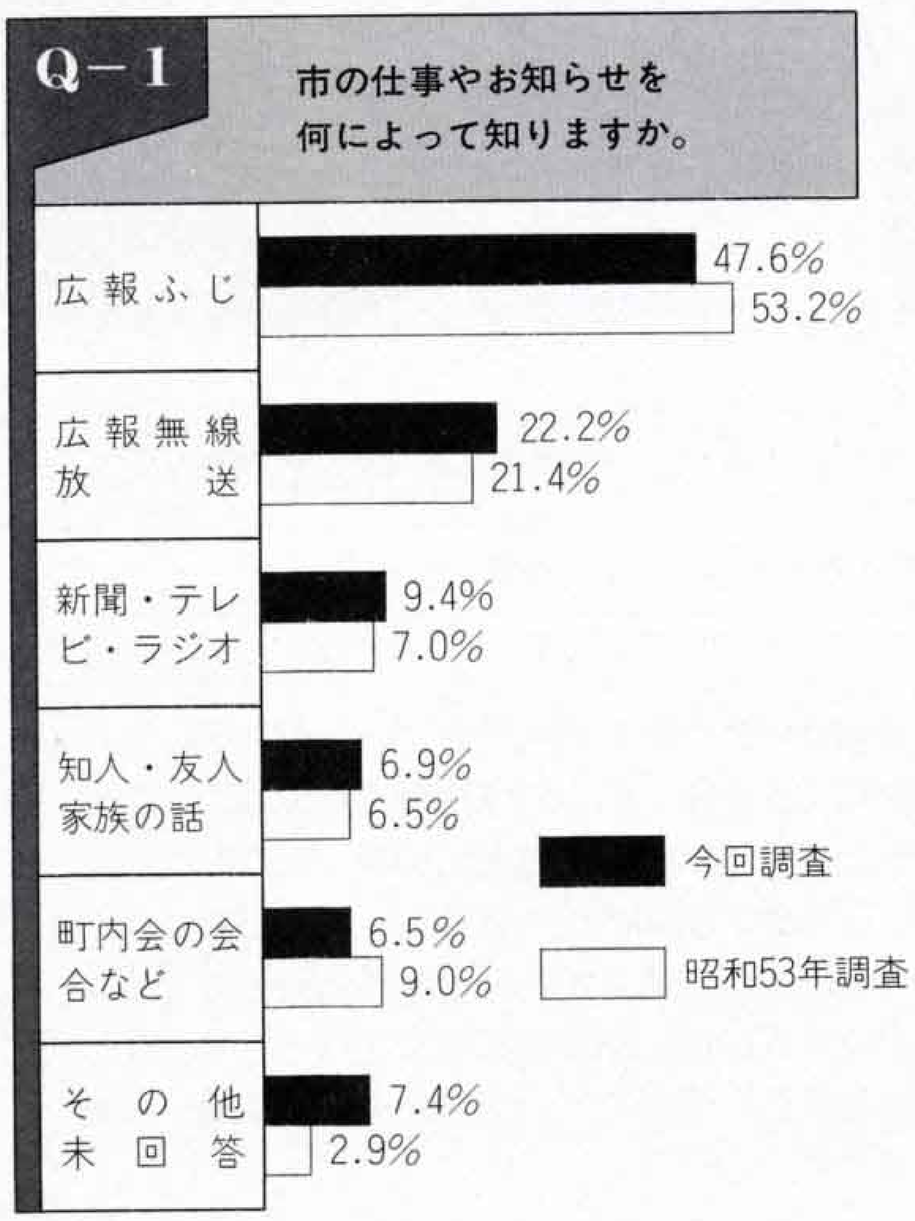
この傾向は、男女別・年齢別などの区分でもほとんど同じ結果です。前回調査（第七回）とは率に若干の変動はありますが、両者が大きな比重を占めていることは変わりません。

回収結果

◇調査対象者　3,000人
◇回　答　者　1,671人
◇回　収　率　55.7%

※結果は百分率で表示しました。表示した百分率は少数点以下第２位を四捨五入してありますので、合計が100にならないことがあります。

Q－1　市の仕事やお知らせを何によって知りますか。



第16回 世論調査結果

市民と行政の

PART1 広報紙

愛読者No.1は40歳代主婦

問二から問七までの設問は広報紙に関連したものです。

問二では、「必要なところだけ読む」四十・五%、「全部読む」三十八・二%など、程度の差こそあれ全体の九十六%の市民が広報ふじに目を通していることになります。

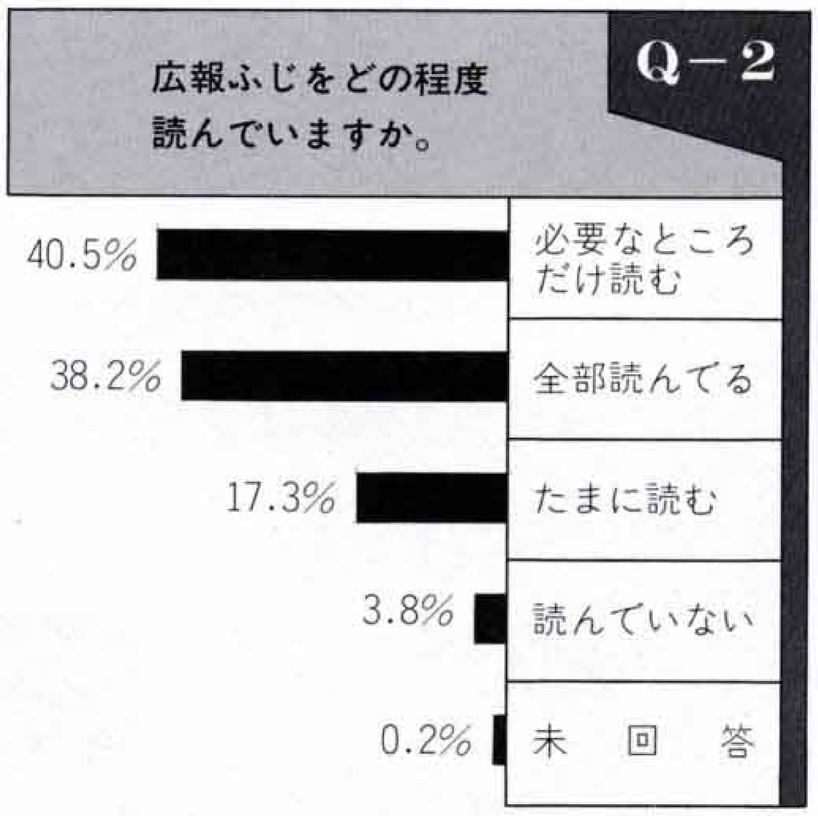
また、読者層は年齢別で四十歳代（九十八・五%）、職業別では、主婦（九十九・五%）という結果がでました。

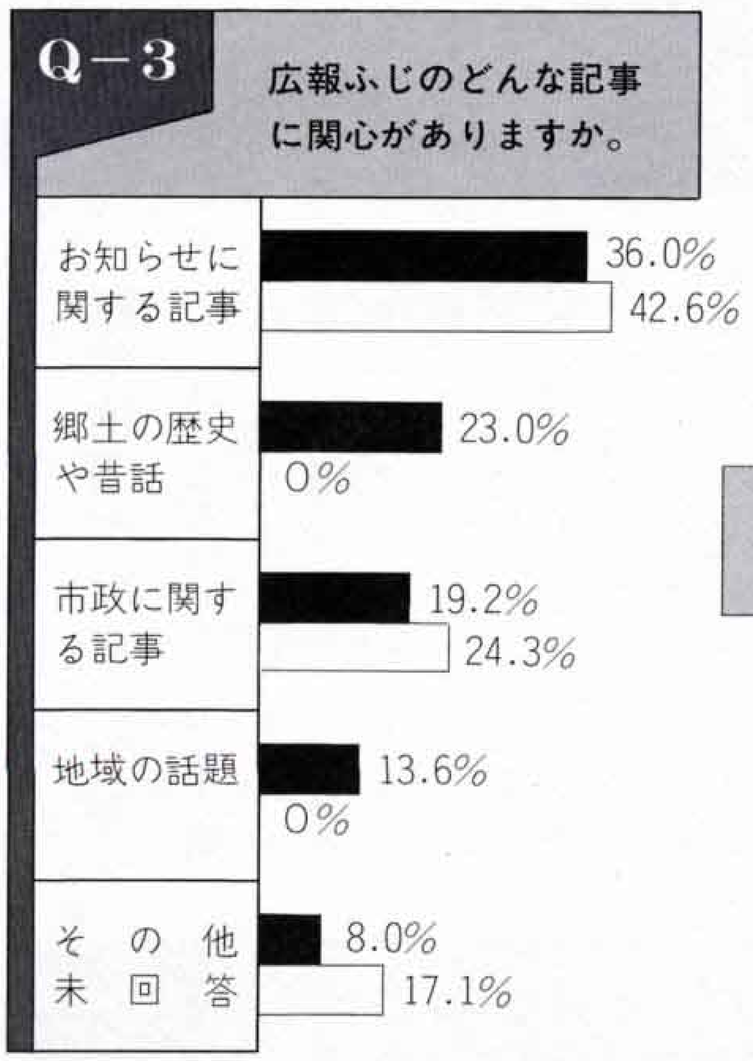
基本はお知らせ記事

問三の「どんな記事に関心がありますか」の設問では、「お知らせに関する記事」・「郷土の歴史や昔話」・「市政に関する記事」・「地域の話題」・「市政に関する記事」の順になっています。

これは、男女別、年齢別など地の区分でも同じ傾向にあります。

昭和五十三年調査でも「お知らせに関する記事」が第一位であることから、行政広報の基本はお知らせ記事といえそうです。また、市民が郷土の歴史や文化に興味を持ってきたことがわかります。





内容はおおむね理解

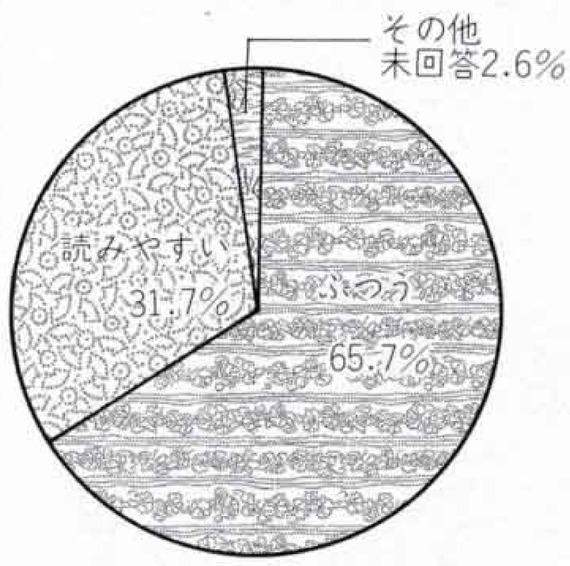
問四の設問では、「ふつう」と「読みやすい」の両者をあわせると九十七・四%となり、この比率は男女別、年齢別など他の区分でも同じ傾向です。

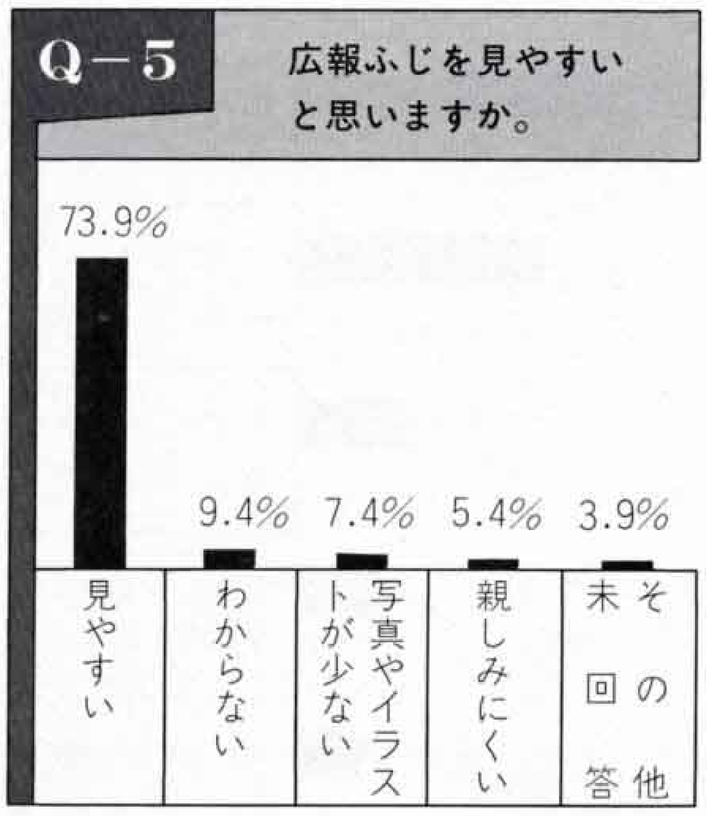
このことから、広報ふじは文章や内容がおおむね市民に理解されていると推察されます。

問五は、広報ふじの紙面構成・レイアウトに関する設問ですが、七十三%の市民が「見やすい」と答えています。

しかし、「写真やイラストが少ない」・「親しみにくい」は、二十歳代や居住年数三年未満の人、家族構成が夫婦だけなどの市民では十%を超えています。

このことから、写真の数や紙面構成に工夫を凝らし、より多くの市民に親しまれる努力が必要であるといえます。





男女別・年代別で変化が

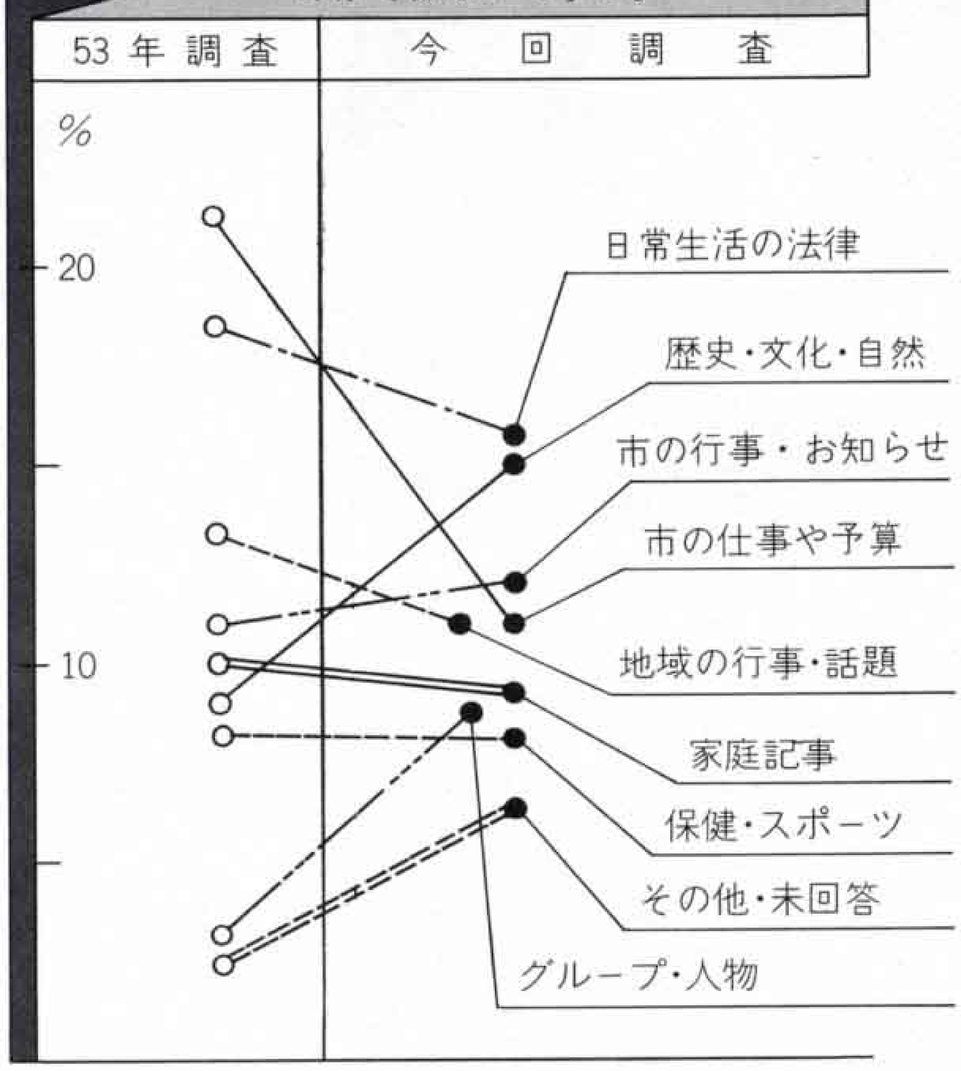
問六は、広報ふじに掲載してほしい記事を尋ねたものです。

全体では、「日常生活の法律」、「歴史・文化・自然」、「市の行事・お知らせ」と続きます。男女別では、男性が「市の仕事や予算」、女性が「日常生活の法律」をそれぞれ一位に挙げています。

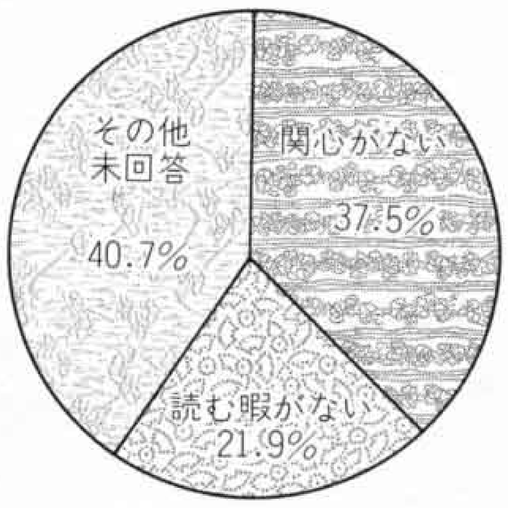
年齢別では、三十代、四十代が「日常生活の法律」を、五十代、六十代が「歴史・文化・自然」を二十代が「スポーツ・健康」などをあげ、年代によって変化が見られます。しかし全体的には各回答に差はなく、市民はバラエティーのある記事を希望しているようです。

問七は設問二で「広報紙を読んでいない」と答えた人が三・八%。その理由として「関心がない」、「暇がない」をあげています。

Q−6 広報ふじにどんな記事をとりあげてほしいですか。



Q−7 設問2で読んでいないと答えた理由は何ですか。



PART2 広報無線

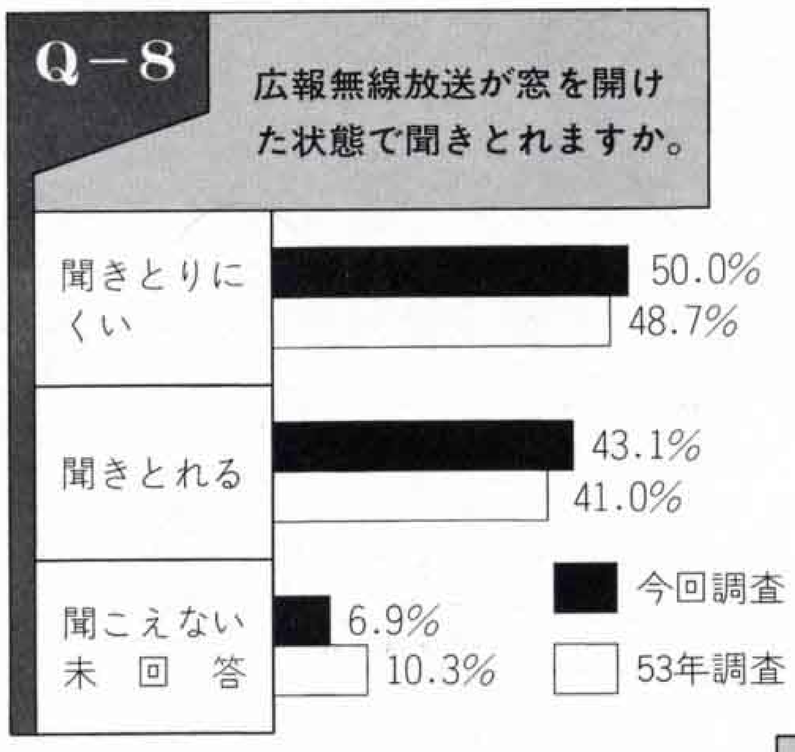
難聴地域が徐々に改善

問八は、広報無線放送の聞き取り状況についての設問です。

市では、窓を開ければ聞き取れる放送の大きさを一応の目安としています。

全体的には昭和五十三年調査と大きな変化はありませんが、若干ですが「聞き取れる」がふえ、「聞こえない」が減っています。「聞き取れる」の率が最も高い地区は浮島地区で六十六・七%。「聞き取りにくい」、「聞こえない」をあわせた率が最も高い地区は吉原地区で六十八・六%でした。

Q−8 広報無線放送が窓を開けた状態で聞きとれますか。



「放送の重複」対策に新方式を検討

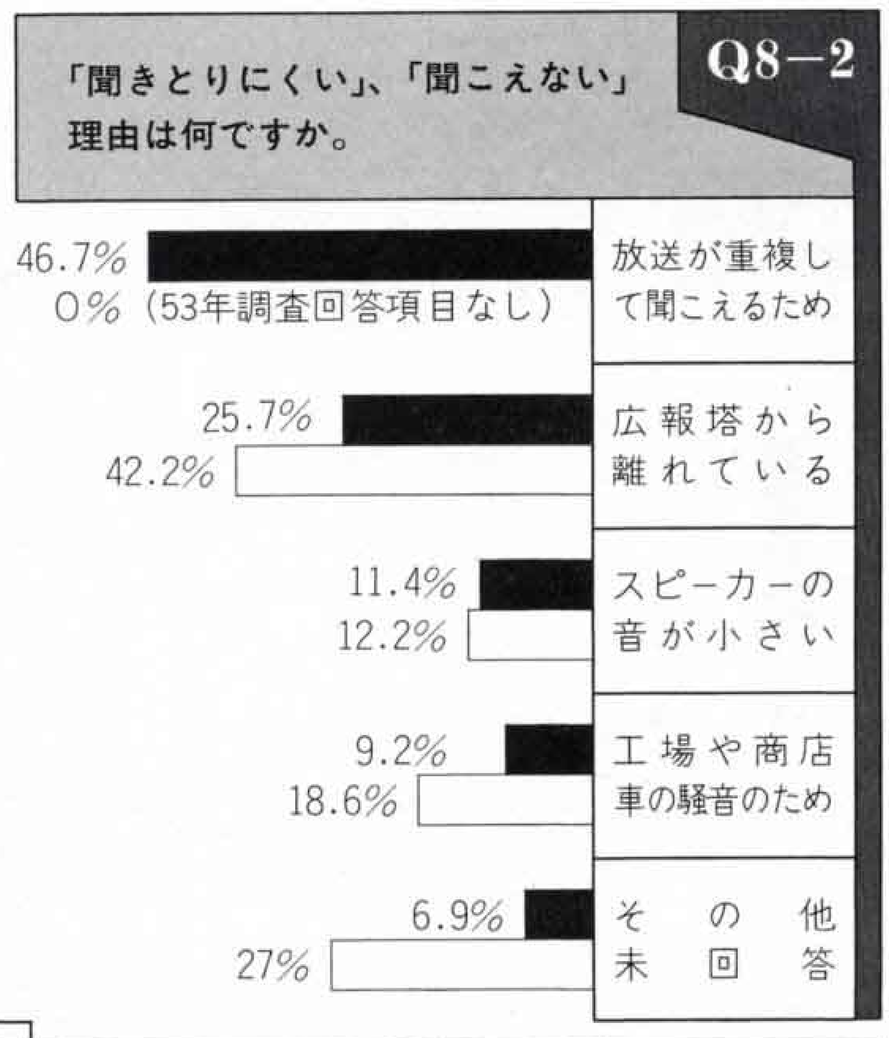
問九では、「聞き取りにくい」・「聞こえない」理由を尋ねました。

「放送が重複して聞こえるため」が四十六・七%と最も多く、地区別でも、ほとんどの地区が同じ理由を一位にあげています。

五十三年調査では、「広報塔から離れている」が四十二・二%で最も多かったのですが、現在本市の広報無線塔の数は日本一を誇り、今回の調査では大幅な減少となりました。

しかし、新たに「音声の重複」という問題が生じこの対策として、受信局を二分割し、それぞれ一回ずつ放送する方式を検討しています。

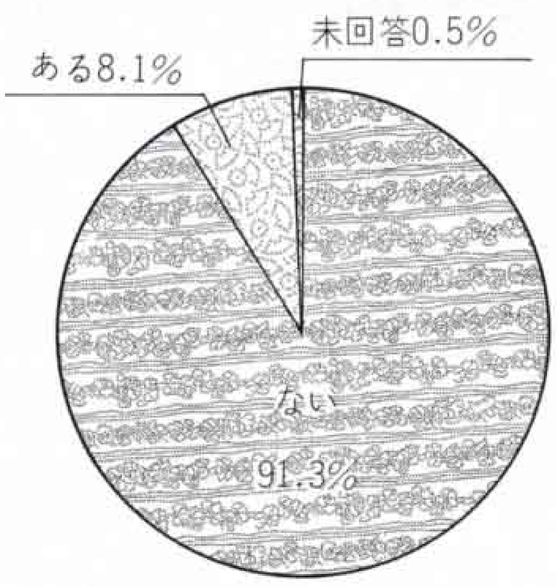
Q8−2 「聞きとりにくい」、「聞こえない」理由は何ですか。



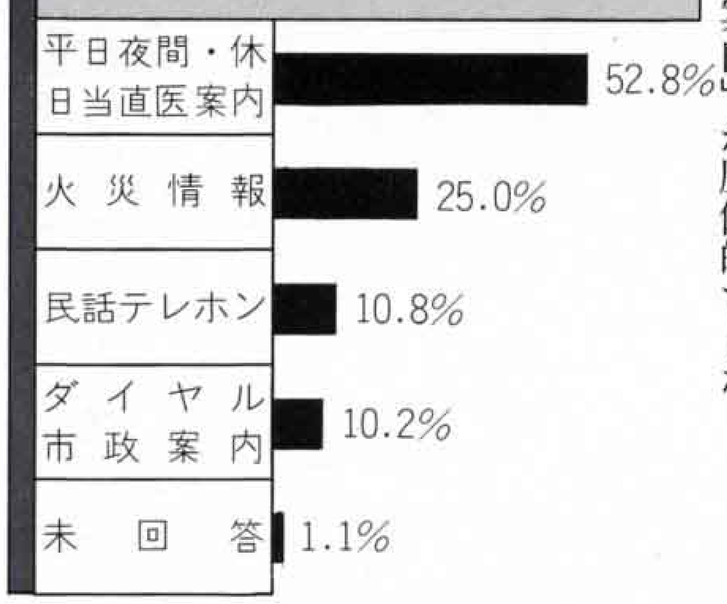
テレホンサービスのPRを

問九の設問では、市のテレホンサービス利用経験者が八・一%しかおらず、今後・積極的にテレホンサービスの存在をPRしていく必要があります。また利用項目は「当直医案内」が圧倒的でした。

Q−9　テレホンサービスを利用したことがありますか。



Q9−2　利用したテレホンサービスの内容は



△民話テレホンを録音中の中学生

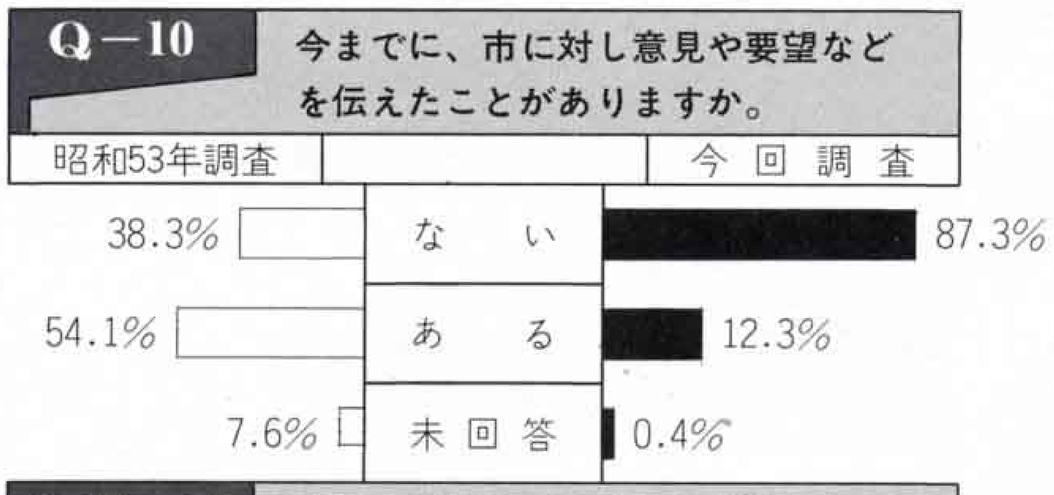
PART3　広聴

市への意見要望は減少傾向

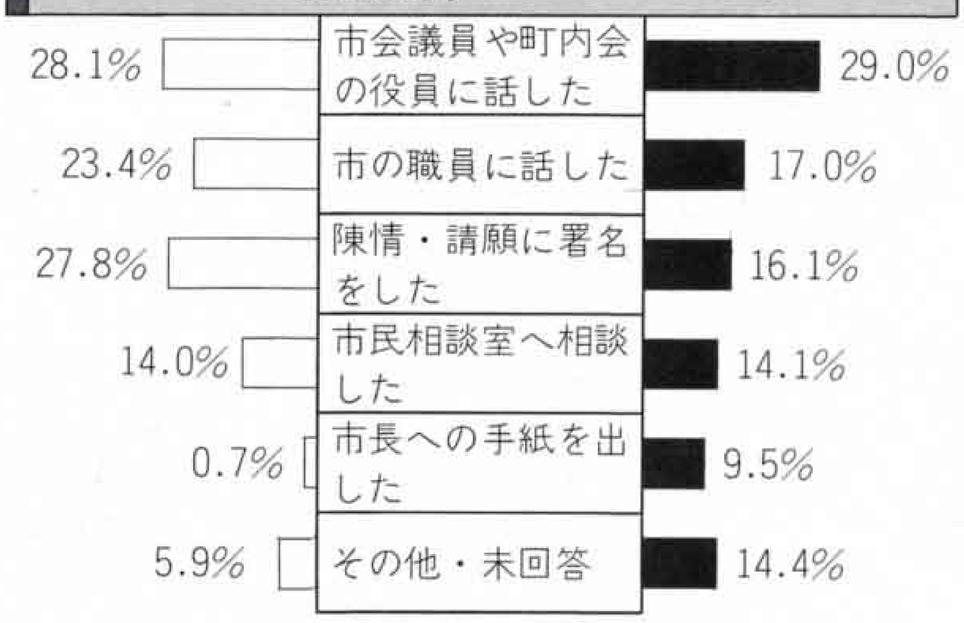
問十から問十二までは、市政に市民の皆さんの意見や提案・要望を取り入れるための活動、広聴に関する設問です。

昭和五十三年調査と比較すると、今回の調査では正反対の結果がでました。「意見や要望を伝えた」が十二・三%で前回の約四分の一。逆に「伝えたことがない」が八十七・三%で前回の約二倍となっています。これは十年前に比べ、本市の産業文化都市としての機能が整備されてきたことを裏づけるものですが、広聴活動のPR不足も一因と考えられ、寄せられた意見等の内容分析調査などが、今後の課題といえます。次に、意見・要望を市へ伝える方法ですが、前回同様「市議会議員、町内会役員」・「市の職員」、「陳情、請願に署名」の順になっています。ただ前回調査では一%にも満たなかった「市長への手紙」が九・五%にも達し、市民と市長を直接結ぶこのシステムが市民に理解され、支持されつつあることを示しています。

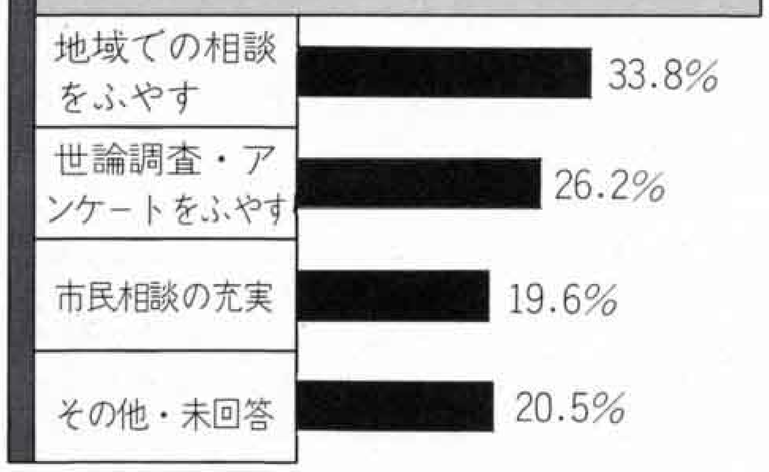
Q−10　今までに、市に対し意見や要望などを伝えたことがありますか。



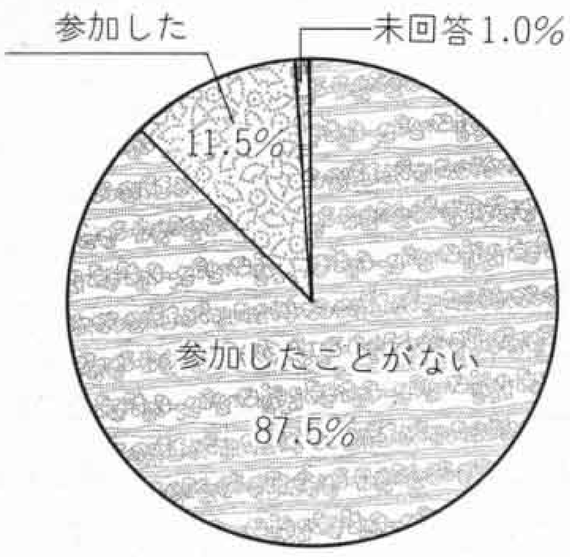
Q10−2　意見や要望をどのような方法で伝えましたか。



Q−11　広報活動を積極的に進めるには何に力を入れたらよいですか。



Q−12　公共施設見学や親子市政教室に参加した経験は。



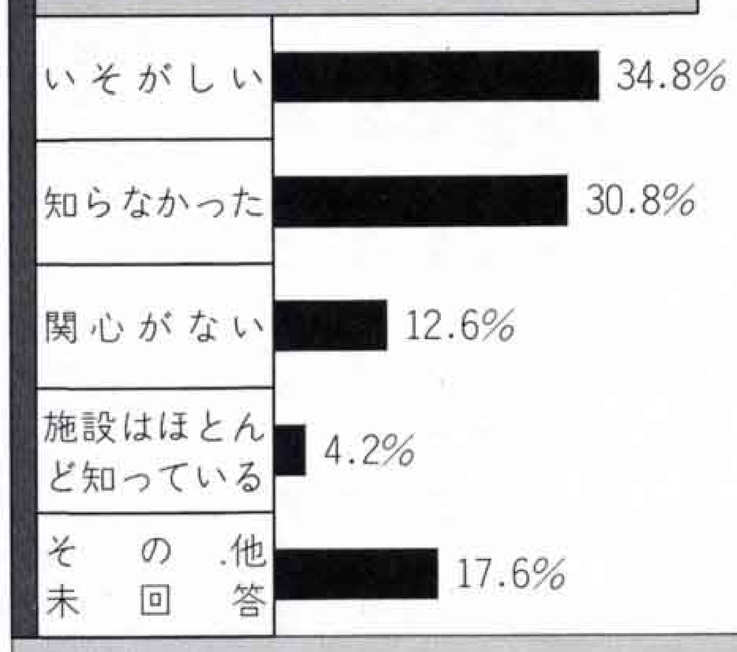
▽親と子の市政教室

◁市長管内行政視察

公共施設見学は市政を知る最短コース

公共施設見学は、市政を身近かに学べる絶好の機会です。問十二に対して、参加経験のある人は十一・五%に過ぎず、また参加経験のない人の三十%は、この事業があることさえ知りませんでした。今後、積極的なPRが必要です。

Q12-2　参加したことのない理由は何ですか。

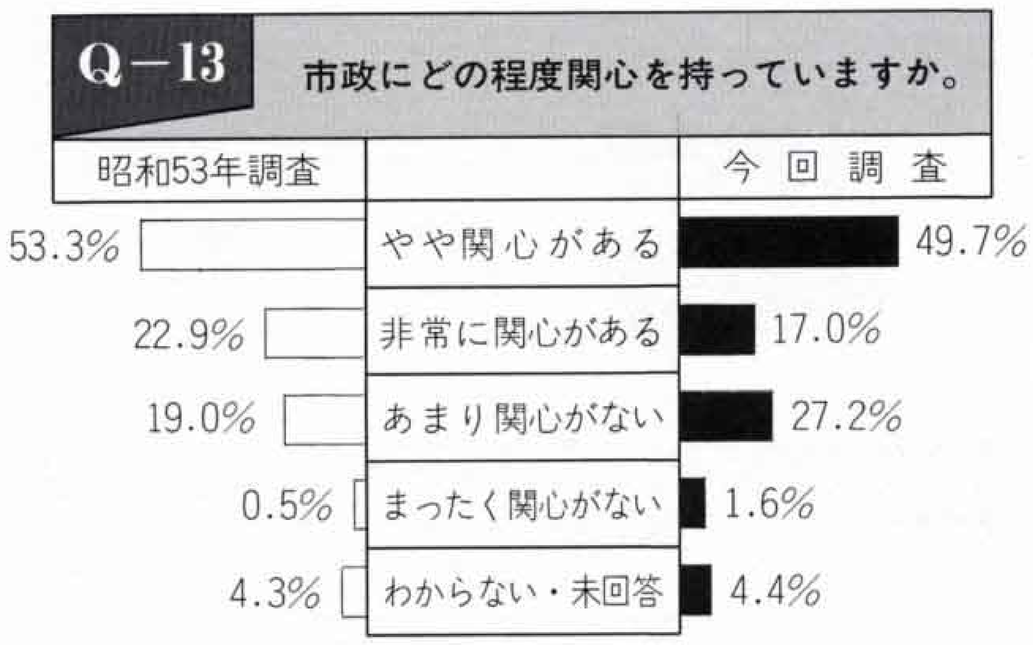


PART 4　市政参加

無関心層が増加

問十三から問十四は、市政に関する設問です。市政に対する関心は「やや関心がある」「非常に関心がある」をあわせて六十六・二%。男女別では男性(七十四・一%)、職業別では自営業(七十八%)が高い率を示しています。しかし前回調査では両者をあわせて七十六・二%で今回は十%の減となっています。また、無関心もふえており、このことは現代の風潮をあらわしていると思われます。

Q−13　市政にどの程度関心を持っていますか。

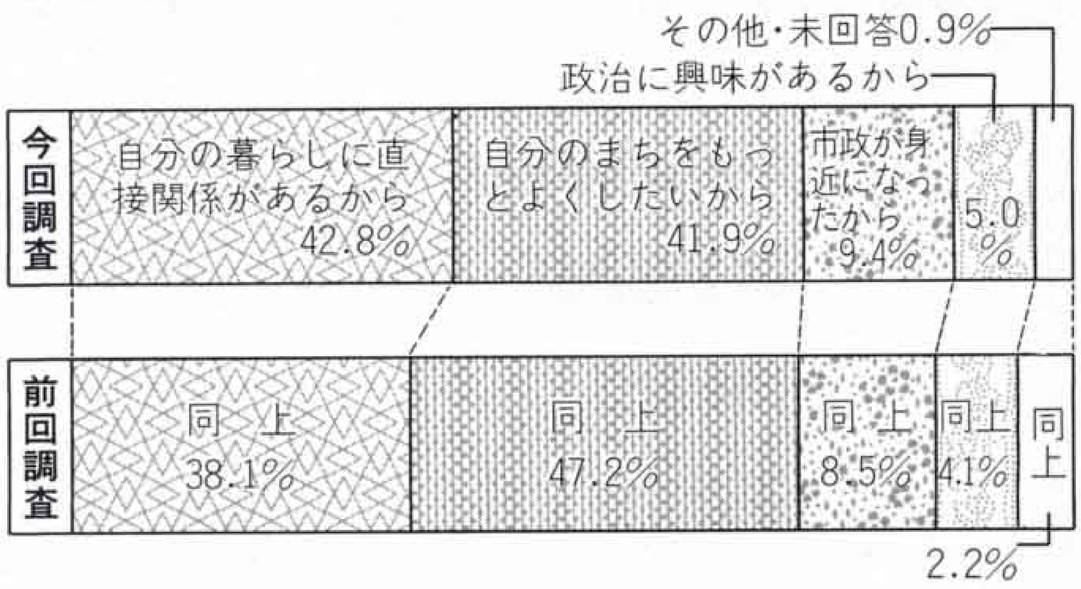


市民生活と市政のかかわり

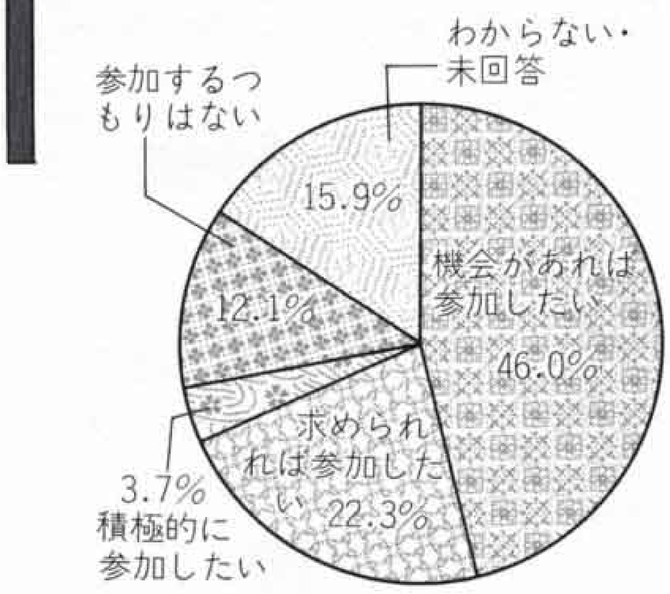
問十三の補助質問では、関心・無関心についてそれぞれ理由を尋ねました。「関心がある」と答えた人の理由としては「自分の暮らしに直接関係がある」を一番にあげ、また「関心がない」と答えた人も「自分の暮らしにあまり関係ない」を第一の理由としています。

これを前回調査と比較すると、「関心がある」で四・七%、「関心がない」で十一・二%とそれぞれふえています。このことからも、自分の生活や欲求を優先的に考える現代風潮のあらわれをうかがい知ることができます。

Q13-2　「非常に関心がある」・「やや関心がある」その理由は何ですか。



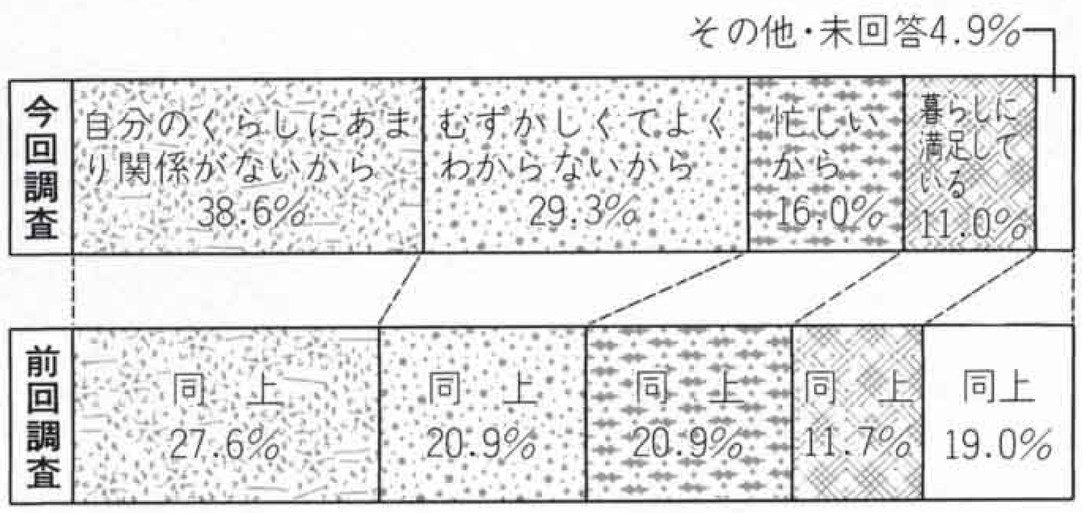
Q−14　今後、何らかの形で市政に参加したいと思いますか。



市政参加方法に工夫を

問十四は、市政参加の設問です。その結果、何らかの形で市政に参加したいと答えた人が七二%もあり、参加方法の工夫で、かなりの市民が市政に参加してくれるのではないかと思われます。

Q13-3　「あまり関心がない」・「まったく関心がない」その理由は何ですか。



◁市政モニター会議

ご協力ありがとうございました。